

胆石の家族性頻度の上昇

An increased familial frequency of gallstones: *T Gilat, C Feldman, Z Halpern, M Dan, S Bar-Meir* (Gastroenterology 84: 243-246, 1983)

胆石症は先進国で大きな公衆衛生上の問題になっている。スウェーデンやチェコでは、胆石の頻度は20歳以上の男子の30%、女子の50%に認められたと報告され、近年その頻度の急上昇は注目されている。しかし、胆石の家族性因子については、ほとんど研究がない。著者らは胆石がX線法、手術、剖検のどれかで証明された患者の1親等の家族171名と性、年齢、出身地などをマッチさせた200名の対照群との間で胆石の頻度を比較した。まず経口胆嚢造影

法で検査され、写らなかった場合は経静脈造影を行い、それでも写らない場合は胆石があるものとみなした。同時に血糖、血清コレステロール値が測定された。その結果、胆石は胆石家系の20.5%、対照群の9%に発見された。男女別では、胆石家系では女子で22.8%、男子で16.7%、対照群では、女子10.3%、男子8%に認められた。これらは有意の差であった。リスク因子と言われる高年齢、肥満、血糖値、コレステロール値などは、対照群でより頻度が高かった。なかでも統計学的に有意な因子として年齢、女性、家族性、そして肥満が認められた。1937年にKörnerは、既に胆石の頻度が胆石家系では非胆石家系の約5倍であることを報告した。Jacksonらは胆石の手術を受けた連続100人の患者の

うち33人に両親の1人に胆石を認めている。また、配偶者より兄弟に明らかに高い頻度をみた。胆石患者の配偶者と非胆石患者の配偶者間では頻度に有意の差を認めなかった。胆石家系で胆石の頻度上昇の理由の1つに、家族性の食事習慣が言われるが、ある研究で配偶者での頻度が高くないことから懐疑的であるが、先進国でその頻度が急上昇していることは、環境因子としての食事の関連を示唆している。遺伝的に感受性の高い人には、食事などの環境因子が特に影響しやすいのではないか。遺伝的因子と環境因子が共に作用していると思われる。今後超音波検査を用いて更に胆石の家族研究が進められるであろう。

(愛知県がんセンター第1内科

小林世美 抄)

Coffee Break

実験膵癌とアミラーゼ値—膵癌の早期発見に関連して

このCoffee Breakの欄に、昨年(1983年)の1月号から7月号まで、膵癌の早期発見に関して、普段思っていることを中心に書きました。膵癌の早期発見のスクリーニングの1つに、アミラーゼ値が有用であったことを経験していますが、臨床経験の中でわれわれが考えていた事柄が、実験膵癌では果たしてどうなのか、常々気にかかっていました。

多くの動物に発生する膵癌は、腺房細胞癌が多いが、この腺房細胞癌はヒトではまれで、最近、ヒトに多く認められる膵管上皮由来の腺癌と同様の腺癌が、nitrosoamineの種々の誘導体によってハムスターに発生することが報告されています。nitrosoamineの誘導体の中で、N-nitrosoamine (2-oxopropyl)-amine (BOP) による実験膵癌は、膵に選択的に膵管由来の腺癌が高率に発生しますが、この実験膵癌とアミラーゼ値との関連が高橋道人氏により報告されています(Gan 72: 615-619, 1981)。実験膵癌の発生と血中および尿中の膵性アミラーゼを経時的に検討した結果は、

腫瘍の結節が小さい早期では膵性アミラーゼ値は血中および尿中において著しく上昇しており、末期において、腫瘍の結節が大きくなると膵性アミラーゼ値は低下し、正常値に近くなることが判明し、膵癌の発生初期に非特異的な限局性膵炎が必発してくる事実注目しています。

このBOPによる実験膵癌の発生早期に尿中膵性アミラーゼ値の上昇が認められ、末期に低下することは、膵癌の臨床面からは既に報告されて、私共の膵癌例でも同様のことが認められていましたが、実験膵癌においても認められたことは意義深いことと思います。特に膵体部癌は、従来は発見が困難で、診断がつく時点で切除不能例が多く、早期診断が困難でしたが、近年報告された切除可能な体部の小膵癌の8例は、全例でアミラーゼ値の上昇が契機となって発見されており、膵癌の早期発見のスクリーニングに果たすアミラーゼの意義をあらためて強調したいと思えます。

(癌研病院外科 高木国夫)